

小学国語問題集 長文読解・標準編

◇本書の特色

1. 中学入試によく出る作家の名文を精選

中学入試の国語長文問題の題材については、文学史に残る作品から現代人気作家の作品まで、幅広く出題されていますが、本書では、それらの中で、近年取り上げられることの多い作家の名文を選びすぎりました。

設問を解くとともに、筆力のある作家が書いた名文を、ぜひ味わってほしいものです。

2. 読解は「言葉」から——重要語句をピックアップ!

文章を読み解く基本となるものは、何といっても言葉、語いです。

もし文章に出てきた言葉をすべて理解できたとしたら、その文章で伝えたかったことがらを読み取ること、あるいは、その文章についての設問に答えることは、ずいぶん楽になるはずです。

逆に、いくつかの言葉の意味がわからないために、読み進めることにつまずき、ひいては、文章全体の内容がうまくつかめなくなってしまう、ということもあります。

本書では、本文中の語句の注釈とは別に、本文・設問中に出てきた、長文読解において特に大切な語句に★印をつけ、それらの語句の意味、用例をP2とP8にのせてあります。ピックアップした語句の中心は、①人物の気持ち・人柄・様子を表す言葉、②抽象的な意味を表す言葉、③よく用いられる慣用表現です。

①は物語・小説文において、②は説明・論説文において、③は文章全般において、読解のかぎとなる言葉(キーワード)と言ってよいでしょう。

これらの語句を一つでも多く身につけることで、日本語をみがき、長文読解力の向上を目指してください。

3. 記述問題は復習が大切!

近年の中学入試は、記述問題の割合が増えている傾向にあります。

記述問題の書き方のコツをつかむためには、まずは、問題をやりっ放しにしないことです。本書では、記述問題の解答欄を二つ設け、一つを「書写用」としています。自分の解答の結果(○・△・×)にかかわらず、演習後は解説を読み、解答例を「書写用」に書き写す作業を行ってください。

「これくらい書いていけばいいや」ではなく、解答例(お手本)を参考とし、内容的に過不足がなく、整った日本語で書かれた文を書くことを目標としましょう。

■本書に出てくる大切なことば■

(調べた語句には☑をしていきましよう。)

あ行

- あいにく【生憎】具合の悪いことに。「―かぜをひいて欠席した」
- あいまい【曖昧】はっきりしないこと。「―な表現をさける」
- あかし【証し】その証拠。
- あげく【挙げ句】行き着いた結果。「―した―」「―の果て」
- あたかも まるで。ちようど
- あたりさわり【当たり障り】具合の悪いこと。差し障り。「―のないようにする」
- あっけない【呆気ない】張り合いがない。物足りない。「―幕切れ」
- あっけらかん 気にせず、けろりとしているさま。「―だからとても―としている」
- あわただしい【慌しい】あわてていて、落ち着かない。せわしい。
- あわれむ【哀れむ・憐れむ】かわいそうに思う。
- あんい【安易】①たやすいこと。「―な道を選ぶ」②のんきなこと。いい加減なこと。「問題を―に考える」
- あんど【安堵】安心すること。「―のため息をつく」
- あんばい【按配・塩梅】①物事の具合、ほどあい。「いい―に出来上がった」②適当な具合に処理すること。
- いきづまる【息詰まる】非常に緊張して、息がつかまるように感じる。「試合は―展開となった」

□ いささか ほんの少し。わずか。「―言い過ぎた」

□ いすわる【居座る】①その場所に動かないでいる。②引き続きそのままの地位にいる。「議長の座に―」

□ いたわる 同情の気持ちをもって優しく接する。「お年寄りを―」

□ いっぱん【一般】広く認められ成り立つこと。普通。「―的」「―性」(へ反・特殊)

□ いっぺんとう【一辺倒】ある一方だけに心をかたむけること。

□ いまいましい 腹立たしく感じる。しやくにさわる。

□ イメージ 心の中に浮かべる姿、像。「―チェンジ」「―が悪い」

□ いやみ【嫌味】人に不快な感じを与える言葉や態度。いやがらせ。「―なことをする」「―を言う」

□ いれぢえ【入れ知恵】他人に知恵をつけること。他人からつけられた知恵。「だれの―だ」

□ いわかん【違和感】しっくりしない感じ。「―を覚える」

□ うきたつ【浮き立つ】心が楽しく、うきうきする。

□ うちようてん【有頂天】うまくいった喜びで夢中になっていること。

□ うったえる【訴える】①裁判所に申し立てる。②不平などを人に告げる。「窮状(困った状態)を―」

□ うながす【促す】早く物事をするように急がす。そうするよ

□ うんざり がまんできないほど、いやになること。「長時間の説教に―する」

第1回

★印の語句はP2〜8に意味をのせています。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(玉川聖学院中)

1 どうさんのやり方はいつも**唐突だ**。

夏休みも終わり近い、★ひときわ日ぎしの強い日の午後だった。灯台へとつづく防波堤には、ゆらゆらとかげろうがたっていた。暑さを★ものともせず、わたしたちは磯遊びに**a** ネットチュウしていた。お盆を過ぎた海はクラゲでいっぱい、よしひろたちも、もう海で泳げないのだ。

護岸の道に一台の大型トラックが止まった。ボディに「すっ飛び運輸」のロゴマーク。休憩かなと見るともなく見ていたら、スルスルと窓が開いてひげづらの男が顔をだした。

「おーい、なつき、よしひろ。帰るぞ。」

——どうさんの声？ うそ！

すっかり日に焼けているから、わからなかった。

「岡山に帰るん？」

b 留さんに カイリヨウしてもらった短いモリを岩場にほうりだすと、よしひろがかげだした。あわててわたしもあとを追う。

「すんげえー。どうさん、どしたん、このトラック。」

追いついたときには、サルみたいに**c**興奮したよしひろは、自分のお腹の高さまであるステップに足をかけていた。

「ええじゃろ。会社のだ。運転席の後ろ、のぞいてみ。ベッドもあるぞ。」

「ほんまじゃあ、すっげえ。おーい、きてみー。」

事情が★のみこめなくてつっ立っているわたしをおしのけて、地元の子どもたちが次々とトラックに乗りこんだ。最初はあっけにとられていたどうさんも、しまいにはわらいだして、足の届かない子に手を貸してやっていた。興奮してはねまわる子どもたちを満載したトラックは、ゆらゆらと大きな車体をゆらした。

「……帰るって、いまから？」

「おう。島根まで引越し荷物を届けての帰りじゃ。ゆっくりはしとられん。」

こんなの、ない。勝手すぎる！ それでもやっぱり、岡山に帰れるのはうれしかった。よろこんでいいのかおこればいいのかさっぱりわからなくて、日にさらされたように真っ白な頭のまま、わたしは護岸の道に立ちつくしていた。

「晩飯くらい、たべていけばいいだに……。」

いつもはしゃきしゃきした話し方のばあちゃんが、**2**めずらしく★**d**ロゴもっていた。

「そうもいかん。明日も早いんじゃ。」

「ほんで、家は見つかったんか。」

「おう。高岡さんの知り合いが、古い家を貸してくれた。小さい庭もあるけえ、犬も飼うてええそうじゃ。」

「……ほうか。」

しゃべりながらどうさんは、いそがしく**d**レイゾウコをあけたり閉めたりして、中にあった残り物を口につめこんだ。

★あわただしく帰り支度にとりかかった。いつの間にか荷

物が増えていた。潮だまりでひろった、大きさも色も形もさまざまな巻き貝や二枚貝たち。それらをリュックのすきまにぎゅうぎゅうおしこんだとたん、実感がわいた。恵理に会える。うれしーい。すごいスピードで心はどんどん岡山の生活へもどっていく。新しい家って、どんなんだろう？庭のある家に住むのって、初めて。こんどは自分の部屋、持てるかな。よしひろと二段ベッドで寝るのは、もううんざり。ねえ、ばあちゃん、どう思う？興奮ぎみに声をかけようとして、

3 ハツとした。いそいでとりこんだわたしたちの洗濯物をたまたんで手のひらでアイロンをあてるようにいとおしげになでさすっている。——そうか。……ばあちゃん、またひとりになるんだ。気づいたとたん、恥ずかしくなった。あつという間に気持ちを、ばあちゃんから岡山の生活へと★シフトさせていた自分を恥じた。「うわあー」とさけびたくなった。顔をあげたら、じっとわたしを見つめるばあちゃんの目と出会った。

——いらんこと考えんと、前だけ見て歩け。

ばあちゃんの強い目が、そういつていた。4 気持ちがいしんと静まった。

——わかった。そうする。

それから、なにもなかったようにわたしたちは荷作りを仕上げた。

きたときと同じようにパンパンにふくらんだりリュックを背

に、集落のメインロードを下った。きたときはよしひろとふたりきりで心細かった道が、いまはお祭みたいにぎやかだ。腕によしひろをぶらさげたとうさんを先頭に、わたし、手押し車をおしたばあちゃんをつづき、そのまた後ろをぞろぞろと地元の子どもたちがつづいた。そしてそんなばらばらの群れをまとめようと、牧羊犬みたいにリンリンが走りまわって、騒ぎを大きくしていた。

「おーおー、帰りさるんか。そりゃ、さみしゆうなるねえ。」
八百屋の店先のいすから、山崎のおばあさんが声をかけてくれた。

「お世話になりましたなあ。」
わたしより先にはあちゃんがこたえた。

「また、おいでんさいよお。」

声にはださず、わたしは大きくうなずいた。

5 どうさんがむかえにきて以来、わたしはばあちゃんとひとことも言葉をかわしていなかった。なにかいわなきやとあせるのに、どうしても言葉が口からでてこない。いま無理に口を開くと、なにかとんでもなくはずれたことをいってしまいそうで、こわかった。その★あげく貝のように口を閉ざし、ムツとした★仏頂づらのままでいる。でも気持ちからずれた言葉を吐くより、そのほうがずっとまし。そう思った。

坂道を夏音神社までおりきったところで、先頭のとうさんの足が止まった。

「ほう、こりゃあすごい。」

むかえてくれたのは、圧倒的な夕焼けだった。6 暮れ残っ

た空いっぱい、ピンク、オレンジ、赤紫あかむらさきにそめわけられた雲たちが広がって、まるで地球上のありとあらゆる美しい色と形をよせあつめたようだった。ゆっくりと色を濃くしはじめた海が、それをいつそう際きわだたせていた。

フロントガラスに夕焼けをうつしこんだトラックに乗りこんだ。高い助手席から見おろすと、ばあちゃんはますます小さく見えた。いつの間にかとなりにならんで、留さんが立っていた。

「ばあちゃんのとりの男、ありや、何者じゃ？」

キーをさしこみながら、びっくりしたようにとうさんがたずねた。

「……留さん。ばあちゃんの＊命綱。」

数時間ぶりにだしたわたしの声はかすれていた。

「命綱ア？ どうゆう意味じゃ。なんであがにくつついて立っとんじゃ。」

しつこく＊こだわるとうさんが、子どもじみていておかしかった。胸むねに温ぬるかさが広がった。よかった。わたしにとうさんやよしひろや恵理がいるように、ばあちゃんに留さんがいてくれて。

車体をふるわせてエンジンがかかった。8 まいわなきや、い

窓をいっぱいにおろし、わたしは大きく口を開いた。なのに、ひりついたのどがくっついて、声がでなかった。……、いましかないのに。わたしはあせった。そのときだった。リンリンがほえた。窓わくに足をかけ、大きく二回。ワンワン、

ワンワン。その声は護岸の道をわたり、海までひびいた。ミヤ、ミヤ。カモメがこたえた。よかった。リンリンがいてくれて。あれはきつと、リンリンのさよならだ。……ありがとうかもしくない。

わたしはそつと、バックミラーにうつったばあちゃんに手をあげた。

(八束澄子『海で見つけたこと』)

※唐突…びっくりするほど急だ。だしぬけ。

※命綱…生きていくのに頼りにするもの。

問一 —— 線部1「とうさんのやり方はいつも唐突だ」について、次の問いに答えなさい。

① この場面において唐突なこととは具体的にどのようなことですか。十字以内で答えなさい。

② 唐突なことについて、「わたし」の思いが述べられている形式段落をさがし、はじめの四字をぬき出して答えなさい。

問二 —— 線部2「めずらしく口ごもっていた」について、次の問いに答えなさい。

① この時のばあちゃんの気持ちを説明しなさい。

〈書写用〉

② この気持ちをよく表している「ばあちゃん」の動作を本文中から十五字でぬき出して答えなさい。(句読点をふくむ)

問三 —— 線部3「ハッとした」とはどのようなことに気づいたからですか。気づいたことについて書いて書いてある部分を本文中よりさがし、二十字以内でぬき出して答えなさい。(句読点をふくむ)

問四 —— 線部4「気持ちがしんと静まった」とありますが、ばあちゃんのどのような思いをくみ取ってそのようになったのでしょうか。ばあちゃんの思いの説明として正しいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 私のことなど心配しなくてもよいから、「とうさん」にしましたが、急いで荷作りをしなさいという思い。
- イ 私のことを心配してくれてうれしいが、おまえたたちのつらい生活のことを考えると、私も岡山に行き、一緒に暮らしたいという思い。
- ウ 私のことなど心配しなくてもよいから、それよりも「とうさん」を助けて、親子で仲よく生活するようにという思い。
- エ 一人暮らしの私は、明るい気持ちでいるからさみしくはない。むしろおまえたたちのことが心配だ。新しい家に引っ越しても暮らしに困るだろうという思い。

--

問五 ——— 線部5 「どうさんがむかえにきて以来く言葉をか
わしていなかった」とありますが、それは「わたし」に
どのような思いがあったからですか。その理由となる一
文を本文中よりさがし、はじめの五字をぬき出して答え
なさい。

問六 ——— 線部6 「暮れ残った空いっぱいにくようだった」
の一文に使われている表現技法を次の中から二つ選び、
記号で答えなさい。

ア 擬人法 イ 倒置法 ウ 対句法 エ 直喩法

問七 ——— 線部7 「それをいっそう際だたせていた」とあり
ますが、「それ」とはなにを指していますか。その部分を
本文中より十字以内でぬき出して答えなさい。

問八 ——— 線部8 「いわなきや、いまいわなきや」について、
次の問いに答えなさい。

① この時、「わたし」が言おうとした言葉を本文中より二
つさがし、ぬき出して答えなさい。

② 「わたし」は二つの言葉を口に出して言うことはでき
ませんでした。そのかわりにしたことは何ですか。本
文中より一文でさがし、はじめの五字をぬき出して答え
なさい。

問九 ——— 線部 a、e について、カタカナは漢字に直し、漢
字には読みを記しなさい。

e	c	a
	d	b

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(城北埼玉中)

福井県の若狭地方に、「地藏盆」という少し変わったお祭りがある。

お地藏さまをほこらから出し、海で洗って、絵具できれいに色を塗る。そして家の座敷や公民館のようなどころ、あるいは組み立て式の小さな建物など、特別な空間にお祭りする。お地藏さまの前にはひな壇があって、たくさんのお菓子やごちそうが供えられ、七夕にも似た笹の葉の飾りつけ……。

この夏、雑誌の取材で、初めてその「地藏盆」を見ることができた。お地藏さまは、どれも派手で楽しい。背中に赤と白の朝日新聞のマークのようなものを描いてあるのや、緑と黄の着物やら、とにかく、にぎやかな配色だ。にっこりと、眉や目、口も描かれている。

「地藏盆」の大きな特色は、子どもがとりしきることで聞いている。お地藏さまの彩色をはじめ、飾りつけなど、すべて子どもが主役。そしてひな壇の前に陣どり、不思議な※鉦や太鼓を鳴らしながら、声をそろえて唄い、通る人たちにお賽銭を催促する。

(A)

なーもじぞう でえぼさつ

なーもおけそこ ……:

賽銭を入れると、同じ節で、言葉が変わる。

なーもじぞう でえぼさつ

……:あーりがとさん ありがとさん

小さな石にお地藏さんを描き、おわんを並べ、道ばたに出張している子どももいた。

まーいってんか まいってんか

まーいらにゃ とおさんぞ

「お参りしてよ、お参りしてよ、お参りしないなら、通さない」という意味だろう。参る、とはすなわち、1である。

子どもたちは、それなりに楽しんでいる様子だったが、「昔はもっと2……」という言葉が、くり返し大人たちの口から聞かれたことが、印象に残った。

子どもの数が年々減っているの、活気が今ひとつ、というところもあるのだろう。

それに加えて、「子どもたちの夢中になり具合が、どうも、足らん」という、3の入りまじった思いが、どの人の胸にもあるようだった。

「昔は、地藏盆ゆうたら、それはそれは楽しみで、興奮して夜も寝られなかった」

「ゆかた着て、鉦たたくのがおもしろくて、みんなでお賽銭をかける時はドキドキしましたなあ」

「お菓子がこんなに食べられるのも、この時ぐらいですから、嬉しくて嬉しくて……」

自分の子ども時代を思い出し、重ね合わせるだけで、大人たちの声には自然と4熱がこもってくる。

子になりたい大人、大人になりたい子

「南無大菩薩」の旗を囲んで

山のような袋菓子や小銭こぜにに対して、子どもたちは「大喜び」とはいえない。中喜び、**5**小喜び程度である。それでも、喜んで顔は可愛らしいし、素直にお祭りに参加している姿は、見ていて心が惹かれる。財布の小銭はすっかりなくなり、慌あわててタバコ屋さんで両替りょうかえしてもらったほどである。

(B)

昔は泊りこむこともあったらしいが、今は八時で帰る、ということになっていく。その八時がくると、さっと帰る子どもが多い。見たいテレビ番組でもあるのだろうか。そこでまた、大人たちのつぶやきとなる。

「今の子は、ファミコンやテレビで忙しいから……」

「私らの頃は、いつまでも、いつまでも、太鼓たたいていたかったもんやけどなあ」

腕時計を持つ子らに聞はなく

7 という名の夜を迎える

形は変わっていないが、お祭りの中身は、確実に変わっているのだなあ、と思う。**8**、子どもにとってのお祭りというもの。

ふと見ると、笹の葉にぶら下げられた紙に漫画が描いてあり、幼い文字でこう記されていた。

「地藏盆は、おこづかいがもらえらるぞ、ラッキー」

ラッキー、という言葉は、子ども達の気分をなかなかよくとらえているのではないだろうか。ちよっとしたいいできごとがあったり、思いがけず得しちやったりした時に、軽くつぶやく——ラッキー、とはそんな言葉だ。

(C)

何人かの大人たちは「今の子は冷めている」と言っていた。

9、当の子どもたちは、「ラッキー」と思うぐらいには喜んでるわけだから、冷めているとも言いきれない。ただ、昔のような、**10**天にも舞いあがるようなワクワクした気分や興奮を、味わっていないことは確かだろう。

「はじめてアイスクリームを食べたときには、こんなおいしいものがあるなんて、と思ったわ。田舎のおばさんのところへ行く汽車の中で二個買ってもらったときは、嬉しくて夢を見ちゃった」というような話を、子どものころ母からよく聞いた。私もアイスクリームは好きだが、夢を見たことはない。

(D)

「※デイスコっていうのは、あれは要するに、毎日が盆踊りということだな」と言った父の言葉なども思い出す。

中喜びや小喜びがたたくさんある日常に慣れてしまうと、なかなか大喜びができなくなる。それは幸せなことなのか、**11**案外そうではないことなのか。

「地藏盆」のその日、昔の子どもは今の子どもよりも、何倍も楽しかっただろう。けれどそれは、お菓子やおこづかいをもらえない日常を、送っていたからこそなのである。トータルすれば、今の子のほうが、やっぱり何倍も楽しい思いを味

わっているのだろうか。

けれど、とまた思う。楽しい環境かんきやうにあっても楽しいと感じなければ、それは楽しくないのとあまり変わらない、という気もするのだ。

12 豊ゆたかさ、ということについても、同じようなことが言えるだろう。

「地藏盆」の夜に見た、大人と子どもの表情からは、様々なことを考えさせられた。取材で訪れた第三者の私わたしでさえ、こうである。実際に体験している人たちの胸には、もっともつといるいろいろな複雑ふくざつな思いが※去来きよらいしていることだろう。

子どもの数が減っているのです、最近は大人数たちも手伝うことが多そうだ。いまの子どもたちが大人になるころは、どうなっているのだろうか。

子どもらの祭りと呼ばれし地藏盆

消えゆく最後の灯ともし火を見つ

もちろん、消えると決まったものではないので、地元のかたたちには申し訳わけない歌だ。が、何かしら灯ともし火の揺ゆらめき、今にも強い風が吹ふいてきそうな不安を、私は感じてしまった。それゆえにこそ、鮮あざやかに彩色さいしきされたお地藏さまの姿や、笹の葉の飾り、子どもたちの唄う声などが、忘れがたいせつな※さを持って心に刻きまれていた。

13 翌日よくじつ、近くを流れている美しい佐分利川さぶりという川を見た。

地藏盆の歴史を、そばで見守ってきた川は、ただただ深く

沈黙ちんもくしていた。

時代という時のでこぼこならしつつ

静かに流れてゆく佐分利川

(俵万智『かすみ草のおねえさん』)

※鉦：平たいかね。たたきがね。

※ディスク：音楽に合わせてダンスが踊れるホール。

※去来：ある感情が浮かんだり消えたりすること。

問一 空欄1に入る語句として最も適当なものを次から一つ

選び、記号で答えなさい。

ア そのお地藏さんに祈いのること

イ そのおわんに賽銭を入れること

ウ その子どもたちにあいさつをすること

エ その石にお地藏さんを描くこと

問二 傍線2「……」に省略されていると思われる気持ちとして最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア となり村からもたくさんの方が参加して一緒にいっしょになって

祭りを盛り上げたのになあ。

イ たくさんのお菓子やごちそうがお地藏さんの前に供え

られたのになあ。

ウ 大人たちが中心となって準備じゆんびをした格式かふしきのある祭り

だったのになあ。



エ 一年間夢見ていた祭りに子どもたちが夢中になって参加していたのになあ。

問三 空欄3に入る語句として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 怒りと驚き イ 希望と不安
ウ 不満と寂しさ エ 期待とあせり

問四 傍線4「熱」・傍線11「案外」について、

1 傍線4「熱」と同じ意味を持つものとして最も適当なもの

- ア 光熱 イ 熱弁 ウ 熱病 エ 地熱

2 傍線11「案外」の意味として最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 予想とは違ひ イ 当然のように
ウ 言いかえると エ あるいはまた

問五 空欄5・8・9に入る言葉として最も適当なものを次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。(一度使った選択肢を二回以上使ってはいけません。)

- ア しかし イ あるいは
ウ すなわち エ とくに

問六 傍線6「慌ててタバコ屋さんで両替をしてもらった」とありますが、筆者は何のために「両替をしてもらった」のですか。最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

5

8

9

ア お地藏さんに賽銭を供えるため。

イ 自分の食べるお菓子を買うため。

ウ お地藏さんに供えるごちそうを買うため。

エ バスに乗る時のバス代にするため。

問七 空欄7に入る語を本文中から漢字二字で抜き出して答えなさい。

問八 傍線10「天にも舞いあがるようなワクワクした気分や興奮」とありますが、昔の子どもはなぜそのような気持ちを味わっていたと筆者は考えていますか。その理由が書かれている箇所を本文中から二十六字で抜き出し、その最初と最後の三字で答えなさい。(句読点、カッコなども字数に数えて答えなさい。)

問九 傍線12「豊かさ、ということについても、同じようなことが言えるだろう」を説明したものとして最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現在は昔に比べてはるかに豊かになったかもしれないが、私たちは今こそその豊かさを捨て、昔の不便な生活にもどるということを考えていかなければならないのではないか。

イ 現在は昔に比べてはるかに豊かになったかもしれないが、物のなかつた時代のことをしっかりと学ばなければ、本当の豊かさというものは見えてこないのではないか。

ウ 現在は昔に比べてはるかに豊かになったかもしれないが、豊かさの本質が見失われている今、私たち一人一人が自分にとっての豊かさとは何かを考えるべきではないか。

エ 現在は昔に比べてはるかに豊かになったかもしれないが、豊かさに囲まれた中でもそれを豊かだと実感することができなければそれは豊かであるとは言えないのではないか。



問十 傍線13「地蔵盆の歴史を、そばで見守ってきた川は、ただただ深く沈黙していた」を説明したものとして最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 若狭地方の人々を長い間見守ってきた佐分利川は、すっかり様変わりしてしまつた地蔵盆の祭りや人々に対し、怒りの表情をたたえながら流れていた。

イ 時代によって社会や人々の★価値観は変化してきたが、佐分利川だけはその変化に流されることなく昔のままの姿で若狭地方の人々を見守るように流れていた。

ウ 長い年月の間に変わつてしまつた若狭地方の人々と同様に自分自身の姿をも変えてしまつた佐分利川は、まるで恥じらうかのようにひっそりと流れていた。

エ 時代の変化に合わせるように流れを変えてきた佐分利川も今ではすっかりと落ち着きを取りもどし、若狭地方の人々をつつみこむようにゆっくりと流れていた。



問十一 次にあげる文章が入る箇所として最も適当なところを文中の(A)〜(D)から一つ選び、記号で答えなさい。

夏休みもそろそろ終わりというころ、何故か「地蔵盆」といってお祭りがあつて、よくわからなけれどお菓子やおこづかいやらがもらえる。ゲームや漫画とは違ふけど、たまにはこういうのもいいね——そういうノリだろう。

